

＋7【うちゅうおぼけ】

懐爺がいました。

「前にわたしは【ひこぼば】が一番こわいといいましたが、ひとつ忘れていました」

「なんじゃい」

ぼくは嬉しさと恐ろしさが、いりまじった気分でききました。

「【うちゅうおぼけ】です。正体がわからないという意味では、これが一番わからない」

「かいじいにもわからんのか」

「わかりませんね。何しろ異次元（いじげん）のおぼけですから」

「その、いじわるげんさんとはなんじゃい」

「いじわるげんさんじゃありません。異次元のおぼけ」

「いみがわからんのう」

「あと三年もたてばわかりますよ。異次元とは次元がちがうんです」

「ますますわからんのう」

「たとえば、わたしたちの在るところと、ちがうところに在るんです」

「ちがうところなら、こわくないのう」

「いえいえ、ちがうところということは、手がとどきません」

「こっちの手がとどかんなら、むこうも手がとどかんじゃろ」

「まあ理屈的にはそうですが、それでもそのあたりにいそうなのがこわいんです」

「【うちゅうおぼけ】なら、うちゅうからきたんか」

懐爺は困った顔で、

「まあそうです。というか、そうらしいです。何せ正体がわからないから、そういうしかありません」

「つまり、うちゅうじん、ちゅうことじゃろ。うちゅうじん、だいかんげいじゃ」

宇宙人なら本で見たことがありました。

鮪（たこ）に似ていて、かわいらしい。

ちょっとともだちになりたいくらい。

「宇宙人だって、歓迎したくない宇宙人もいますからねえ」

「たこおとことちがうんか」

「それは架空（かくう）の話でして、宇宙には想像もできないくらいの生物がいるんです。その生物がおぼけになったのが【うちゅうおぼけ】ですから、もっと想像ができない」

「そうぞうができないちゅうことは、しんだあとみたいなことかい」

「金ちゃん、よく気付きましたねえ。わたしたちも死んだら、地球おぼけになるかもしれません。つまりその、【うちゅうおぼけ】がこわいのは、死ぬのがこわいのとよく似ています」

「わしはしぬのなんかこわくないがのう。いたいのかくるしいのはいやだけど、しんじまったらいたくもくるしくもないからのう」

懐爺は苦笑いして、

「でも、死んでしまったら、好きな女の子にもともだちにも、会えなくなりますよ。おいしいものも食べられないし、おもしろい本も読めませんよ」

「わしは、すきなおんなのこは、おらん。すきなともだちはいるけど、【まるのみおんな】のはらのなかじゃ。おいしいものなんか、たべたいともおもわんし、おもしろいほんだって、よみたいともおもわん。それによ、しんじまったら、おいしいもおもしろいも、どうせほしくなかるう。あいたいなんちゅうきもちもおこらんからのう」

かなり正直にいいました。

でも懐爺にあえなくなるのは困るけど、このころぼくは、いずれ遠からず懐爺がいなくなることを、知らなかったのです。

それどころか、想像をしたこともありませんでした。

「なるほど。金ちゃんは哲学者（てつがくしゃ）みたいですね」

「かいじいとおぼけにはあいたいけど、かいじいにもおぼけにも、しんでもあえるきがするしのう」

と、これも正直にいいました。

「そうですか。金ちゃんは死ぬのがこわくないんですか」

懐爺は首をかしげました。

「かいじいだって、こわくないじゃろ」

「怖いですが、もう年寄りですから、諦めているかんじですかね」

「そんなら【うちゅうおぼけ】がでてきたら、あきらめるってことかの

う」

「そのとおりです。諦める。覚悟する。もうそれしかありません」

「つまらんのう。なんとかならんかのう」

懐爺はすこしかんがえて、

「つまらんのうが人間の一生です。でもあんがいつまらなくないのかもしれません。わたしたちは獣（けもの）や鳥たちを、はたから見ていて、つまらんとはおもわないでしょう。かなりたのしそうに動いたり飛んだりしているではありませんか。つまらん人間だって、獣や鳥たちがはたから見れば、かなりたのしそうに見えるのではないのでしょうか」

「だども、みじかすぎるのう。どうせなら、いちまんねんとか、あきてしまうくらい、いきられたほうがいいとおもうがのう」

「金ちゃんは死ぬのが怖くないはずですよ」

「しぬのはこわくないが、生きていたほうが、まだだいぶましなきがするんじや」

よく、死んだほうがましだっていう人がいるけれど、あれは嘘だ。

「花も散ります。葉っぱも落ちます。草も枯れます。でも根っこがあればまた復活します」

「だば、わしらだって、しんでも、ふっかつするんじやろな」

「おそらくそうでしょう。でも、新しく咲く花は、前に散った花とはちがう花です」

「にていても、ちがうんか」

「ちがいます。でもそれでいいんです。花としては生きているんですから」

懐爺は断固としていいました。

このいいかたは頼もしくて好きでした。

「だば、にんげんがしんでも、まただれかがうまれれば、いいんじゃないかのう」

「そのとおりです。はいこれで、宇宙と死の話はおしまいです」

なんだかよくわからなかったけれども、【うちゅうおぼけ】もなんだかよくわからないものらしいから、今日はこれでいいか。

もし明日も生きていたら、もっとわかりやすいおぼけにあいたいものだ、ぼくはつくづくおもいました。